

## 近代モンゴル政治の基盤を築いたボグド・ハーンの思想

モンゴル国科学アカデミー国際研究所

日本学術振興会海外招聘研究者（下関市立大学）

○. バトサイハン

モンゴルの歴史において、ボグド・ハーンに関する記述は概して批判的であることが多く、極端なものは、「ボグド・ゲゲーンはモンゴル人民の最も危険な敵であり、残忍な人物であった」と結論付けるものまである。その結果、社会主義時代にはボグドについては、あらゆる歴史書、文学、映画において最も不快な様子で描いてきたのである。確かに、近年、閲覧が禁止されていたアルヒーフの史料が開放され、その時代の研究は精力的に行われているが、歴史に対する態度は変化していないといえる。私は1911年の民族革命、ボグド・ハーンについての研究に基づき、第8世ジェブツンダムバ・ホトクトはモンゴルの民族革命の指導者、父であると結論付けた。この度、自らの研究を継続して、ボグド・ハーンにモンゴル国を発展させようとする思想があったのかという問いに答えることを試みたい。もしそのような思想があったのであれば、いかなる思想で近代モンゴルの政治の基盤を築いたのか、本報告では民族、領土、政治政策、国際関係、経済、社会、精神、教育に関する考察から答えを探してみたい。結論としては、ボグド・ハーン政権が20世紀初頭に国家規模で、あらゆる分野において実行したモンゴル民族の重要な基盤を発展させる思想は、モンゴル民族の根幹を確かに守り、近代モンゴルの政治の基礎、発展の道の起点となったと見ている。よって、1911年のモンゴル民族革命の指導者、父であるボグド・ハーンは近代モンゴル政治の生みの親と呼ばれるべきであると考えている。

氏名：額日登巴雅爾（エルドンバヤル）

氏名のローマ字表記：ERIDENGBAYAER

所属：内モンゴル大学蒙古学学院蒙古歴史学部

専門分野：モンゴル近現代史

発表のタイトル：内モンゴル人民共和国臨時政府の設立過程及びその目的

発表要旨（600字～800字程度）：

1945年8月8日のソ連、8月10日のモンゴル人民共和国による対日宣戦布告とソ・モ連合軍の内モンゴル地域や中国東北地方への進軍は、日本軍を内モンゴルから撤退させた。ソ連の参戦に関係するソ・英・米、三国によるヤルタ協定（1945年2月4-11日）は、戦後、モンゴル人民共和国の現状（独立）を維持し、内モンゴルを中華民国の領内にとどめると決定していた。従って、内外モンゴルの合併は絶望的であったにも拘らず、終戦直後からフルンボイル自治省政府、東モンゴル人民自治政府、中部内モンゴルの蒙古青年革命党などが一斉に内外モンゴルの合併へと乗り出した。

この時期は、内モンゴル人にとって、唯一のモンゴル人国家であるモンゴル人民共和国と合併する絶好のチャンスであり、また同時に、政治主権が日本から中華民国へとそのまま移ってしまうことが最大の懸念であった。一方、対日宣戦布告をする際に、モンゴル人民共和国首相チョイバルサンが行ったラジオ演説と、モンゴル人民共和国軍が内モンゴルへ越境する際に、内モンゴルの民衆に対しておこなった宣伝は、内外モンゴルの合併を促すような内容であった。従って、内外モンゴルの合併運動は、決して内モンゴル側からの一方的な行為ではなく、内外両側からの悲願であったことがわかるであろう。

この歴史的瞬間を民族統一へと導くべく事前に状況を察知し、1943年頃から内モンゴルの解放を目的とした準備を進めていたのが蒙古青年革命党であった。本発表では、蒙古青年革命党のコントロールの下で、組織メンバーたちとその周辺の人々が、終戦直後の状況を内外モンゴル合併の絶好のチャンスであると認識し、合併に向けて意欲的に動いていたという事実を明らかにする。ただ、彼らは、モンゴル人民共和国側に対して積極的に働きかけたにも拘わらず、結局はモンゴル人民共和国政府に拒否されてしまった。ヤルタ協定、すなわち当事者たちの頭ごしに大国の首脳によって一方的に決定された結論が決定的な力を持っていたため、モンゴル人民共和国側も政策を転換せざるを得なかったのである。

今までの研究では、窮地に立たされた内モンゴル側の要人達はやむを得ず内モンゴル人民共和国臨時政府を樹立するに至り、何とかそれをモンゴル人民共和国に承認してくれるよう要請したが、それすらも実現せず、最終的に内モンゴル人民共和国臨時政府は中国共産党に接收されることが明らかにされてきたが、筆者は今回の発表で、内モンゴル人民共和国臨時政府の設立過程及びその目的を再検討したい。即ち、内外モンゴル合併が失敗に終わり、将来の方向が分からなくなっていた内モンゴル側に対し、チョイバルサンが戦時中に内モンゴルへ派遣したモンゴル人民共和国副首相 B. ラムジャブが、内モンゴル人民共和

国臨時政府の樹立を促していたことを新たに発掘した資料で証明し、内モンゴル人民共和国臨時政府の設立目的は、将来的に内外モンゴルを合併するためであったことを明らかにしたい。

エルドンバヤル 2017/2/18

氏名：哈木格図（ハムゴト）

氏名のローマ字表記：Hamugetu

所属：広島大学大学院総合科学研究科

専門分野：内モンゴル近現代史

発表のタイトル：近代内モンゴル民族主義運動とラマ勢力——近代内モンゴルの政教関係（1924～1936年）

発表要旨（600字～800字程度）：

近代内モンゴル民族主義運動は清朝時代の盟旗による分断を越えて内部を統一し、対外的な自立、とりわけ漢族の支配に対するモンゴル族の独自性の保持を目指した。清朝以来、内モンゴルの寺廟の多くは領地と属民を有し、宗教的な形式の下に俗的な支配を行っていた。そして寺廟はチャンキヤ・ホトクトを頂点とする扎薩克喇嘛制度の管理下におかれ、盟旗から「自治」的な存在であった。そのため、寺廟も内モンゴルの内部統一の目標であった。1924年の蒙事会議では、王公（幕僚も含む）が中心に、仏教改革を訴え、ラマ勢力に対する旗ジャサグの管轄の強化を提起した。

1925年の善後会議以来、寺廟の帰属に関して王公とチャンキヤ・ホトクト7世の間に対立が発生した。民国以来、チャンキヤ・ホトクト7世は「廟産保護」・「儒教国教化の反対」という共通の目的の下、中国仏教界と共に活動し、1920年代初めまで中華民国の宗教政策に反対した。しかし、その反抗運動が失敗し、彼は活動の重心を内モンゴルに移した。善後会議で、彼は自らを内モンゴルの「政教合一」の宗教首領であると主張した。彼の主張は、内モンゴルの寺廟およびラマ勢力の行政的統合を図る王公の既定方針に合わなかったのである。しかし、モンゴル人の仏教信仰が深く、民族主義運動を展開する際にはその力量を軽視できない。王公はパンチェン・エルデニ9世の宗教的影響を利用した。また、王公は宗教権を王権に従属させることを目指したラマ旗——シレート・フレー旗の「政教分離」の要求をアピールにし、チャンキヤ・ホトクト7世の「政治干渉」を阻む選択をした。

近代内モンゴルは、王公が中心に、「政教合一」の否定そして「政教分離」の方針の下で、寺廟そしてラマ勢力に対するチャンキヤ・ホトクト7世の清朝以来の俗的な管轄権の削除と盟旗のコントロールの強化をはかった政教関係にあったといえる。

氏名：娜荷芽（ナヒヤ）

氏名のローマ字表記：NAHEYA

所属：内モンゴル大学蒙古学学院蒙古歴史学部

専門分野：東北アジア近現代史、モンゴル近現代史

発表のタイトル：「満洲国」期におけるモンゴル人留学事業について

発表要旨（600字～800字程度）：

「満洲国」時代の内モンゴルにおける高等教育政策を端的に示すのが、モンゴル人の留学事業である。政府は、モンゴル人側の興安学院の大学昇格の要望を却下し、日本留学を通じてモンゴル人に対する高等教育を実施する原則を貫いた。その理由について、政府はモンゴル人に対する学校教育は、初等教育及び中等教育の整備充実に重点を置くためである、と説明した。しかし、1930～40年代の内モンゴルにおける教育は、内モンゴルの学校教育のみで完結したわけではなく、日本留学と合わせて、一つの教育プログラムを構築したのである。

モンゴル人留学事業所管機関は、興安総署、蒙政部、民生部教育司と何度も変更になったため一貫性をもっていなかったが、既存のモンゴル文化・教育政策の枠内で、留学事業が展開された。さらに、政策の施行主体は、地方公署や中央政府であったが、それ以外に、財団法人蒙民厚生会の独自の留学事業もあり、モンゴル人側は民族問題の解決や近代化に向けて留学事業を進めていた。政府推進のモンゴル人留学事業は、1933年から興安総署により始まり、興安局時期の1942年ごろにピークを迎えた。他方、蒙民厚生会による留学事業は、1940年代から始まり、終戦まで続いた。当時、モンゴル人の官僚たちは、内モンゴルの近代化について、どのような考えをもっていたのか、そしてどのように留学生政策を考えていたのか。本報告は、『中華民国満洲国留日学生名簿』、『満洲国留日学生録』、『興安嶺』、『満洲帝国文教関係法規輯覧』などやアジア歴史資料センターの文献資料を用いて、その一端を考察するものである。

氏名：包宝海

氏名のローマ字表記：BAO BAOHAI

所属：東京外国語大学大学院総合国際学研究科特別研究員・中国青海師範大学法学与社会科学学院講師

専門分野：記憶論、内モンゴル近代史

発表のタイトル：文化的記憶としての「ガーダー・メイレン蜂起」

発表要旨（600字～800字程度）：

本報告は、モンゴル民族の英雄とされるガーダー・メイレンを事例として、文化的記憶の動態を考察するものである。マリタ・スターケンによれば、「文化的記憶」とは、「公認された歴史的言説という領域の外部で人びとに共有されているが、文化的生産物に絡み合い、文化的意味にそめあげられているような記憶である」。文化的記憶は、物体、映像、そして、具体的な表象を通じて産出される。

ガーダー・メイレン (Gada Meiren, 1892～1931) は 1929 年末から 1931 年代初頭まで、内モンゴルのホルチン地域で、漢人農民による過度な農地開墾に反対して武装蜂起を起こし、1931 年 2 月 12 日 (旧暦) に熱河省派遣の李守信の部隊によって鎮圧され、戦死した実在の人物である。彼は、モンゴル人の土地と利益のために戦ったとされており、そのためにモンゴルの人びとのあいだでは一定の尊敬を集めつつ、その名が記憶されている。

ガーダー・メイレンが内モンゴルのホルチン地域のモンゴル民族のさまざまな「文化的記憶」の形となりつつということも指摘しておきたい。なぜなら、内モンゴルにおいて、ガーダー・メイレンに纏わる記憶は、その出来事の経験者や目撃者などの狭義の想起の主体＝「想起の共同体」の枠を超えて、ホルチンなどの民間芸能者、作家、芸術家などの創造力と再構築によって生き活きと継承されている。その端的な実例が、ウリゲルト・ドーやホーリン・ウリゲルなどの口承文芸、連環画、「ガーダー・メイレン記念碑」、「ガーダー・メイレン広場」などの文化的生産物である。

内モンゴルにおいて、ガーダー・メイレンの記憶は、これらの表象や「文化的生産物」を通じて、特定の形式と社会文化的意味を付与され、再現され、語り継がれてきた。本報告では、こうした表象や文化的生産物の在り方を再考することによって、「文化的記憶」として構築される「ガーダー・メイレン像」の形成過程について考察することを試みた。

氏名：N. アムガラ

氏名のローマ字表記：N. Amgalan

所属：モンゴル国ガンダンテクチェンリン寺学術文化研究所・研究員

専門分野：モンゴル・チベット仏教学

発表のタイトル：あるモンゴル僧の未報告の著作の概要

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴル研究においてモンゴル人の風俗・歴史文化・宗教信仰の面で多くの研究がなされており、モンゴル僧がチベット語で著した著作の研究も行われている。その点で、モンゴル国の著名な学者である Ts. ダムディンスレン、L. フレルバートル、ガブジ僧 Sh. ソニンバヤル、L. テルビシ、僧 R. ビャンバーらの研究は、極めて重要な意義を有している。1959年に開催された第1回モンゴル言語文字大会においてガンダンテクチェンリン寺のハンボ・ラマ S.ゴンボジャブが行った「モンゴル人がチベット語で著した作品」という報告は、新世紀のモンゴル研究の一対象となったのである。この報告において200以上のモンゴル僧の著作が検討された。これより後、内外のモンゴル学者はモンゴル僧がチベット語で著した作品の研究を深化させている。

現状では、モンゴル僧がチベット語で著した作品の数について正確な統計は出ていない。総じて、500以上と言われているが、研究者たちが挙げる数字には差が生じている。その一方、我々は、未研究・未確認のモンゴル僧の著作を探求・研究している。我々は2013～2014年に現地調査を行った際に、ドンドゴビ県サイハンオボー郡にて高齢のナンサルマー氏が保管する15巻から成る、あるモンゴル僧の著作を閲覧した。この著作の保管者である84歳のナンサルマー氏から全巻の複写許可を得て、研究を行った結果として、本報告では、本著作について初歩的な紹介を行いたい。

この15巻の作品を著した学僧は、ドンドゴビ県サイハンオボー郡にある、バリ・ラマ・ダムツァグドルジが建立した「グンドウジャンバリン」寺の僧で、大衆にヨンズイン・バグシの名で知られた D. ロブサンミンジュールドルジ（1865-1937）である。ドンドゴビ県出身の、多くの著作を著した学僧が知られている。バリ・ラマ・ダムツァグドルジ（1781-1855）、ザワー・ダムディン・ガブジ（1867-1937）らに続く、この僧による新発見の著作について紹介する。

【備考】発表はモンゴル語、日本語への通訳を松川節が行う予定です。

氏名：ゴンボスレン・ガルバヤル

氏名のローマ字表記：Gombosuren GALBAYAR

所属：東京外国語大学世界言語社会教育センター特任教授

専門分野：モンゴル近代文学

発表のタイトル：モンゴル詩における二行詩および四行詩の構造と体系の諸特徴

発表のタイトルのモンゴル語原題：Монгол шүлэг дэх хоёр ба дөрвөн мөрт шүлгийн бүтэц

ТОГТОЛЦООНЫ ЗАРИМ ОНЦЛОГ

発表要旨（600字～800字程度）：

詩とは具体的な意味を表出し、韻律（リズム）に支配される文あるいは行によって構成されたものである。いくつかの行が押韻（ライム）と韻律によって連合し、一つのまとまった意味を持って成立した構造を、詩の連（スタンザ）と呼ぶ。モンゴル詩の連の基本的単位は2行あるいは3行からなる詩である。モンゴル人の思惟、生活、芸術表現の観点から、2行から4行、3行から6行が生まれた。したがって、モンゴル詩の連は、基本的に2行ないし4行、3行ないし6行で構成されている。今回の発表では、モンゴル詩における二行詩および四行詩の連の特徴について取り上げてみたい。

#### 1. モンゴル詩における二行詩の構造と体系

モンゴル人の生活文化や象徴的思惟によれば、万物は一对の組合せとして存在する。いいかえれば、「二」という数は存在の象徴である。方便と般若、陰と陽、天と地、昼と夜、朝と晩、父と母、兄と弟、男と女といったように、万物は二つの組合せからなっている。このような見方に基づいて、モンゴル詩の連の基本的な単位が二行詩あるいは二行連句（対句）であることを明らかにし、モンゴル詩における二行詩の特徴について論じる。

#### 2. モンゴル詩における四行詩の構造と体系

モンゴル人に共通した考え方によれば、「二」から「四」が生じる。いいかえれば、「二」から「四」の意味と尺度が生じる。このような定義にしたがえば、二行詩はその基本的な構造と体系を保持しながら四行詩になる。二行詩から四行詩が生じる時、どのような原理に基づき、どのように変化するのかを明らかにする。また二行詩から四行詩が生じることによって、詩の意味にどのような変化が生じるのかも明らかにする。二行詩および四行詩の特徴を明らかにするために、モンゴル人の世界観、文化、思惟、日常生活の特徴と関連づけて取り上げ、最後に統一的な結論を述べる。（769字）

氏名：上村明

氏名のローマ字表記：KAMIMURA Akira

所属：東京外国語大学

専門分野：モンゴル地域研究、文化人類学

発表のタイトル：民族的エポケー：モンゴル国西部におけるカザフ人とオリアンハイ人の敵対と協力の関係

発表要旨（600字～800字程度）：

モンゴル国のカザフ人とモンゴル人の間には、明確な民族境界が存在し、人的透過性もきわめて低い。しかしながら、西部の牧畜地域では、生業における利益の対立を超えて協力する例もよく見られる。そこには、民族的差異をみとめながら、それを評価にむすびつけない抑制＝判断停止が働いていると考えられる。本発表は、これを民族的エポケーと名づけ、現実の場面において、それがどのレベルで発動するのか、その要件と要件間の相互作用について、牧畜との関係を中心に明らかにしようとする。

①まず、カテゴリー化し評価づける人間の精神のはたらきの中に、民族意識を位置づける。

②つぎに、カザフ人とモンゴル人が混住するモンゴル国西部の生態的条件および歴史的背景を整理する。とりわけ、社会主義国民国家建設における、カザフ人とオリアンハイ人の民族的位置づけについて検討する。また、現在における、両民族のエスニック境界やバヤンウルギー県での状況について述べる。

③そして、カザフ人とモンゴル人との実践の場における個人的な関係がどう成立するか事例を挙げて考察する。また、社会主義時代からの牧地の相互利用と最近の行政的な変化について述べ、牧畜という生業を媒介にして協力関係が構築される条件について考察する。

まとめとして、②の記述や考察における民族対立の構造を明らかにし、ともすれば②の対立に焦点があたる状況において、民族的エポケーが発動し、敵対関係におちいらず、③のような協力関係が構築されるには、一般的にどういった要件が必要かについて考察する。

1.氏名：阿榮照樂

2.氏名のローマ字表記：ARONGZHAOLE

3.所属：奈良女子大学人間文化研究科 中山研究室 博士後期課程

4 専門分野：社会生活環境学

5.発表のタイトル:内モンゴルアラシャ草原における牧畜民の固定式住居の間取り変容過程に関する研究

6.発表要旨：**研究の背景：**内モンゴル自治区では、土地の分配法や漢民族の移住といった政策、また、生活環境、自然環境、経済条件の 変化など様々な要因により、モンゴル牧畜民が移動式住居からバイシンを利用するようになった。これに伴ってモンゴル族の伝統的な非定居文化及びその住居の様式が失われつつある。現在、アラシャ地域の居住空間も移動式から固定式になり、さらに、散住から集落形成に転換する時期である。モンゴル族の散居居住形態と住居の多様空間構成を分析するには早急な調査が必要とされている。

**研究の目的：**本研究では内モンゴルのアラシャ草原におけ牧畜民の住居を対象として、その間取りの特徴と変容過程を明らかにすることを目的とする。

**調査概要：**本研究では、2011年9月、2012年3月、2012年11月において3回にわたり内モンゴル自治区アラシャ右旗バディンジリングチャで現地実態調査を行った。本研究では各世帯を直接訪問し、ヒアリング調査及び住居の実測調査を行った。

**結論：**アラシャ草原における牧畜民の固定式住居に関して、以下の点を明らかにした。  
①牧地の固定式住居を平面図で分類すると1室型、一行2室型、一行3室型、一行多室型、庭型の5つに分けられる。固定式住居の原型はモンゴルゲルをそのまま固定した1室型円形であり、その後一行2室型になっても、一つの空間を機能別に使い分けて利用し、北側が上座、中央が台所、南が入口というゲルの位置関係は引き継がれていた。一行3室型から部屋を機能別に分化しだしたが、中央の空間が台所であり、入口は南向きのままであった。庭型になると部屋の機能が明確化した。台所は中央ではなくなり、南側もしくは西側に位置するようになった。入口の位置は南に限定されず、南から東の間につくられるようになった。上座は北側のままである。②冬営地バイシンの間取り変容過程は、土地分配以前は1室型円形と一行2室型が中心であった。第1次土地分配以降、一行3室型から一行多室型あるいは庭型基本形オルゲゲルに発展した。ここまでは家族主体の住居であった。第2次土地分配以降、民宿経営のため、旅行者用の寝室、食堂、台所、シャワー室などの増築が行われ、庭型チヘンゲルと庭型ホリエゲルができた。一方、第2次土地分配以降に建築された春営地バイシンは1室型円形と一行2室型であり、間取りの変化はみられない。③冬営地バイシンは全世帯に普及した。主たる用途は牧業であるが、第2次土地分配以降秋季に観光業で使うようになっている。春営地バイシンは全世帯に普及していないが、現在使用されている全ての春営地バイシンの用途は牧業である。秋営地バイシンが建築され始め、用途は観光業である。市街地住居は牧業、観光業と関係なく、子供と高齢者の住居になっている。